



慶應義塾

福澤諭吉と 野邊地尚義

野邊地えりぎ (文筆家、本名・青木
智子・一九七〇文)

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云えり」で始まる、福澤諭吉先生の『学問のすゝめ』初編の

冒頭文は、あまりにも有名である。しかし、全文をじっくりとお読みになつたろうか。この文からしばらく後に「人は生まれながらにして貴賤貧富の別なし。ただ学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり」とある。

慶應四年、上野の山で彰義隊と新政府軍が戦つた上野戦争の時、砲弾や大砲の音が芝新銭座まで響いてきたのに、その音をもつとせず、福澤先生は、英書講読を続けられた……という逸話が残っている。

福澤先生は、何よりも学問を愛しておられた。今のような平和な時代には想像もつかないだろうが、幕末の時代には洋学を学ぶことは、危険が伴つた。いつ攘夷主義者に背後から「攘夷！」と刀で切りつけられてもおかしくなかつた。洋学者は、常に身辺に目を光らせていた。洋学を学ぶことは命がけだつたのだ。

彼らは、蘭学塾で、寝食を忘れて学

んだ。そして、原書を読み解く過程で、諸国の政治、経済、医学、科学、兵学を学んでいった。藩を超えて、日本という国を外から見た。自分たちの住む日本が列強に侵略され、植民地になるのを、何としても阻止しようと議論を重ねた。彼らの団結力は、否が応でも強くなった。

私の高祖父・野邊地尚義も、その一人だつた。蘭学者、英学者、教育者として様々な活動を行った。盛岡の近郊の出身で、江戸、長崎、萩、京都、そして明治維新後の東京……と、当時にしては目まぐるしく動いた。尚義の師にして友人・大村益次郎は、大坂の適々齋塾(適塾)の四代目塾頭であり、福澤先生は、十代目塾頭である。二人は、福澤先生の長崎遊学時代から親交があつた。大村は、番町(今の半蔵門近く)に「鳩居堂」という蘭学塾を開いたが、そこに寄寓して学んだ一番弟子が、我が高祖父である。

嘉永六(一八五三)年ペリーが浦賀に来航して江戸が大騒ぎになつた時、揺籃期に、それぞれの場所で、それぞれのやり方で、新しい日本を創ろうと、学び、我が身を捨てて行動した人々を知るよすがとなれば幸いである。

持参したアメリカ大統領の国書を日本語に正確に翻訳する必要が生じた。幕府は、それまでの翻訳局を大幅に拡大、蘭学に精通した者を重用し、この組織を「蕃書調所」と命名した。国書や列強との条約など、蘭学の需要が急速に増え、さらに、英学も必要となつた。この「蕃書調所」の教授、教授手伝い、見習い教師として、福澤先生、大村益次郎、川本幸民、寺島宗則、西周、杉田玄端、加藤弘之ほか何十名のそうそうたる洋学者が関わっていた。明治維新後、時代を創っていった人たちだつた。

尚義も、維新後、京都の官吏として、英学校、仏学校、独学校を作つた後、日本初の公立女学校を創設している。一カ月もしないうちに、福澤先生がこれを訪れ、大感動で「京都学校の記」を記しておられる。この手記には、福澤先生の世界観、社会観、教育観、そして女性観までがうかがえる。

高祖父の生涯を縦糸に、洋学者たちの活躍を横糸として、昨春秋『紅葉館

館主・野邊地尚義の生涯——明治の民間外交「陰の立役者」を出版した。

紅葉館は、芝にあり、現在の東京タワーの建っている紅葉山の広大な敷地と和風の建物を持つた高級会員制クラブだった。発起人・株主は明治の重鎮であり、外国高官を招くことも多かつた。不平等条約改正のための外交の舞台となつた。高官たちは、この「メンバークラブ」に招かれて、一夜の饗応に与るのを何よりも楽しみにしていた。日本の政界、財界、文学界、美術界など各界の会合にも使われた。福澤先生も、ここでよく演説をされた。「慶應義塾の目的」の演説もここで行われ、その他、記録に残っているものも多い。

尚義は、開業までの一切を取り仕切り、株主、幹事として、亡くなるまで経営に携わつた。不平等条約の完全な改正が見えてきた明治四十二年三月、八十五歳で人生を閉じた。

この書が、野邊地尚義という人間を理解してもらうきっかけになるとともに、幕末から明治の近代化を目指した